

## 士 燮

後 藤 均 平

- 一 問題の所在
- 二 吳志士燮伝の検討
- 三 中国の人士たち
- 四 士燮政權の性格
  - 1 政權を支えるもの
  - 2 没落をめぐる
- 五 士王論評

### 一 問題の所在

二世紀の末から三世紀の二〇年代まで、といえ、中国の歴史では東漢最後の皇帝である献帝の建安年間(A. D. 196~220)がその大部分を占める。周知のようにこの時期は、靈帝の中平元年(A. D. 184)にはじまる黄巾の反乱・初平年間(A. D. 190~193)の董卓専權のあとを受けて、華北では群雄割拠の中から建安元年に献帝を洛陽に迎え入れ

士 燮(後藤)

た魏王曹操が東漢の事実上の政權を乗りつつも、しかもなお各地の諸勢力と対立抗争を展開していた。華南でも、江左に在って孫氏がようやく指導權を握り、ついで荊州の劉表政權と対立してたがいな嶺南の主導權を争ってやまず、建安十五年以降に前者がその捷利を獲るまでは全く混沌たる状況に在った。

このように中国の政局と社会が「中平以来、天下乱離」たる時、劉・孫両氏がともにうかがった嶺南七郡はどのような状況であつたか。

中平以前の嶺南社会ことに越南社会は、一世紀以降とりわけ二世紀に入ると、その一定の社会發展の上に立って、東漢の郡県支配に抵抗する反乱を連続的に發生せしめていたが、中平初年の反乱を最後に、以後半世紀間少くとも記録の上では反乱記事がほとんど見出せない。(この場合、越南を除く嶺南四郡は別である。)かえって越南は交趾郡守士燮のもと、中国の混乱とは対蹠的に「疆場事無き」安

全地帯であり、中国の人士で乱を交趾に避くる者は百を以て数え、士燮政権下で安逸の学業を続け得た、といわれている。天下喪乱の中で中国の学燈が交趾で保たれた、それを交趾の土府君が支えた、というわけで、中国史ことに中国學術史の上で士燮は評判がいい。彼はまた學術保護者であるとともに自らも左氏春秋を治め尚書に一家言を持つ当代注目の学者でもあったらしい。以上のことは三國志呉書士燮伝中の、荀彧に与えた褒微の消息によってわかるのである。

ところで呉志士燮伝を読むと、学者・學術愛好者としてのこの交趾郡太守は「百蛮を震服せしめ、いにしへの南越王尉陀も踰ゆるに足らざる」ところの実力と勢威を誇り、在郡四十余年間「これは郡守の在任期間としては異例に長い」・「南蛮はさながら、國獨立の形勢を呈していたようにえがかれている。ヴェトナムには別に、太守士燮は國人から王と呼ばれていた、という所伝すらある。そして以上の諸点をふまえて、大越史記全書の撰者呉士連は、士燮をたんなる漢末の一太守にとらえず、王王つまり当時の越南の支配者として、すなわち北属期にあつてそれを一時分断したところの越南副政権として、全書に「士紀」期を設けているほどである。

このように一郡の太守としては特異な士燮政権の存在

## 二 呉志士燮伝の検討

士燮の事績を記す基本史料である呉志の本伝は本文計一・八三字、このうち約三分の二を占める彼の死までの記事を最初に取上げて、士氏の行状を紹介しつつ、問題点を拾い上げて見よう。死後の情況「士氏政権の解体」を記した残り三分の一は後節で取り上げる。

本伝の冒頭にはその家系を記して、「士燮、字は威彦、蒼梧廣信の人なり。其の先はもと蒼梧汝陽の人、玉岸の乱に至り地を交趾に避く。六世にして父の賜に至り、桓帝の時日南太守と爲る。」とのべている。これによって、蒼梧郡廣信県(東漢時の交趾)の士氏は一世紀のはじめに華北から移住定着した漢人であり、太守を輩出するほどの在地有力者層であつたことがわかる。後漢書には士賜が太守となつた桓帝時(一四七-一五七)の日南郡について二つの事件が記されている。一は九真日南両郡の民が連帯した反乱(A.D.139-140)であり(南蛮伝)、二は大秦國使の日南郡来訪(A.D.166)である(西域伝)。これらの事件が士賜の太守在任と関わりがあつたかどうかは全く不明であるがともかくも蒼梧郡出身者が日南郡守を拝命したということ、これは日南七郡内に本籍地を置く者の最初の二千百で

士燮(後藤)

は、古くから注目されていたし、近年にも多くの考察がなされている。考察の多くは、中国の學術保護者としての士燮評価であるといつてよい。これは中国史研究の立場からすれば当然のことかも知れないが、では全書に代表して見られる越南史上の士燮政権という評価とそれはどう結びつくであろうか。呉士連は「彼は詩書礼樂を通習して我が國を文獻の邦たらしめた」と一見簡単に愛揚しているように見えるが、本当に「文獻の邦」たらしめたのか、検討を要する。のみならず後漢書(列伝六十七)南蛮伝交趾の条によると士燮政権に先行する二世紀の越南三郡には数多くの反乱が展開している。それらは東漢の郡県支配に抵抗する当時の越南社会の自律的發展の上に立つ一連の動きであつた。だとするとこれらの抵抗運動と、それに後接する、疆場無事、反乱皆無の士燮政権下の社会情況とはどのような連続性を以て結びつけられるのか。そもそも越南史について交趾郡守士燮の支配期間はどのように把握すべきであるか。十この上のような上に立つて、本稿では、呉志士燮伝を中心に、越南史上の士燮政権を考察してゆきたい。最初に本伝を検討することによってさらに具体的な問題点が摘出されるであらう。

あつただけに、定著した士氏の蒼梧社会における威信を窺わせるに足るものである。

本伝では続いて、士燮がわかいとき洛陽に遊學して劉子奇に師事したこと、尚書郎に補せられたが「公事」によって免官したこと、父の死後南郡東県(四川省)の令となり、ついで交趾郡太守に転任したこと、また弟の士壹は交趾刺史(宣化)の下で郡の督郵職を勤めていた。に見出され、士壹が司徒となつて上京すると京都に辟召されたが、初平の乱に遇つて郷里に逃げ帰つたこと、を記す。

士燮が交趾郡守となつたのは何時か。父の死、東県令の期間、ともに年代を明示するものはない。ただ本伝にあつて、「在郡四十余年、黄武五年(A.D.226)に九〇才で死んだ(つまりA.D.186年に生まれた)」と記されているから、郡守拝任時は熹平末年(A.D.191)から中平初年(A.D.193)までにあたると推定される。熹平年説もあるが、私はむしろ尾崎康氏の中平年間就任説に従う。氏は「光和・中平年間の反乱の地域・性格からいって、公算としては、当時、士燮は野にあり、その士民の利害を守つた實跡の政策に応じたというほうが大である。」(尾崎氏「注」)と述べている。これを私なりに補足説明してみると、光和元年(一八九)と中平初年(一九一)には合浦・交趾・九真・日南にまたがる数万人の反乱があつた。この反乱に交趾郡守士燮

の名が見えないこと、反乱を鎮圧した新任刺史朱雋の後漢書本伝に当時の事情を「羣賊並び起るも、刺史・太守はみな輒弱でこれを禁圧しえなかつた」と伝えており、あとで見ると太守としての士燮は決して「輒弱」ではなかつたろうこと、などを合わせ考えると、おそらく光和の反乱期およびその直前の熹平末年に士燮はまだ交趾太守を拝してはいまい。拝任はそれ以後である。

嶺南ではつづいて「官僚が貪悪であつたため」(後漢書(賈琮伝)中平元年(A.D.184)に反乱が起きた。士燮に「貪悪」の評価はない。したがって中平元年までの太守でもあるまい。ところでこの平定に當つた賈琮は、交趾に在任三年、刺史として全国第一の治績を挙げたという(上同)。当時の中国には黄巾の農民運動が繼起していたから、全国第一の比較評価はいささか無理であるが、彼は治安回復の一手段として「良吏を簡選した」(上同)という。良吏簡選とはふつう地方官下の在地属僚を指すと思われるが、これを拡大して刺史統轄下の郡守人事にまで及ぼしたとしてもあながち不当ではあるまい。齡知命に近い巫県の令士燮を賈琮がその任に堪えうる良吏として交趾郡守に表したことは充分考えられる。本籍が蒼梧の人物を交趾の太守に充てても漢制に照らして違背することはない、しかも士氏は嶺南の大姓であり、その威信をむしろ利用すべきではある——このよう

な状況と考慮の中で太守士燮が生まれたのではないか。だとすれば士氏一族の蒼梧における社会的威信は、賈琮も認めるほどに充分なものがあつたとしなければならぬ。私はむしろこのような点に立つて、太守就任の中平年間説を支持する。

さて、嶺南における士氏の勢力は建安年間になると急速に伸びていった。本伝にはつづいていう、交州刺史朱符(朱雋の子)が建安初年(山内氏の説に)に横死して州郡騷乱のとき、士燮の三人の弟壹・輔・武は燮の上表によってそれぞれ合浦・九真・南海の郡守となつた、と。つまり嶺南七郡中の四郡を士氏兄弟が統治したのである。七郡中蒼梧郡守の地位は同郡出身の士氏が望むべきところではない。日南郡は当時林邑勢力によって破壊されつつあり、太守赴任は事実上空名に近く、してみると鬱林郡を除き嶺南で可能な限りの太守の地位を士氏は獲得したのであつて、「州郡擾乱」にその機を掴んだとはいへ、その底に士豪士氏の実力を認めざるをえないであろう。南海太守の士武は数年後に死んだらしく、その後任の名は伝わらないが、嶺南在地の実力者としての士氏の勢威はにわかに脚光を浴び建安年間の交州を掩つた。そして本伝ではつづいて士燮政權の勢威をつぎのように記している。

士燮體器寬厚、謙虛下士、中國人十往依避難者以百數、

耽玩春秋為之注解。

陳国袁徽與尚書令荀彧書曰、「交趾土府君、既學問優博又達於從政。處大乱之中、保全一郡二十余年、疆場無事、民不失業。羈旅之徒、皆蒙其慶。雖竇融保河西、曷以加之。官事小閑、玩習書傳、春秋左氏伝尤簡練精微。吾數以咨問、傳中諸疑皆有師說、意思甚密。又尚書兼通古今大義詳備。聞京師古今之學是非忿争、今欲條左氏尚書長義上之。」其見稱如此。

燮兄弟並爲列郡雄長。一州偏在萬里、威尊無上。出入鳴鍾磬、備具威儀、笳簫鼓吹、車騎滿道。胡人夾轂焚燒香者常有數十。妻妾乘輜輶、子弟從兵騎。當時貴重、震服百蠻、尉他不足踰也。

まず士燮の容姿資質を述べ、ついで袁徽の荀彧に送った書簡を載録し、第三に士燮の勢威について行列の情景を写したのち、「時に當つて貴重、百蠻を震服せしむ。尉他も踰ゆるに足らざるなり」と結んでいる。士燮の学問尊重を賞揚し、彼の威信を指摘した二四〇字ほどのこの一段は、およそ士燮を論ずるとき必ず引用されるところの、士燮評価の中心的史料といつても過言ではない。それだけに慎重に検討する必要がある。

この寛厚謙虚な老太守のもとに乱を避けた中国の人士が百を以て数えた、という最初の敘述は、その一人である袁

徽のつづく書簡内容にそのまま直結している。書簡は太守士燮が學術政術ともにすぐれていることを、とりわけその學識に焦点を合わせて微細を穿ちつつ、称揚しているのであるが、ところでこれを額面通りに受け取つてよいのか、受け取るとしてもこのような書簡の持つ性格——なぜこんな手紙が尚書令の許に送られたのか、という点までも遡つて検討する必要がある。そのためには「百を以て数える」中国の人士の交趾における言動を能うかぎり吟味してみる必要があると思われる。なぜなら、従来の士燮評価が彼を學術上のパトロンとして強調している以上、そこに増集した中国好士の士の行動を洗うことなしにはこの点の実態把握には近づくまいであるから。しかもその場合越南史の士燮をとらえる立場からすれば、交趾に集つた中国人士たちの行動がその交趾社会ひいては越南社会とどのような関わり方を示していたか、それにどのように寄与したか、という点が検討の場合当然問題とされねばならない。

つぎに、士燮の勢威を物語る行列については、つとに福井康順氏が考証されたように(福井氏(註)論著頁106-110, 80-108)出行する士燮の車の両側から盛んに焼香する胡人とはインド人であり、焼香は仏徒の行事である。すなわち当時交趾にインド人が来往し、仏教が伝来していたことがわかるという。ではそのような交趾社会と、その上に立つ士燮政權の百蠻を

實証させた実力とが、この胡人燒香を媒介としてどう結びついているのか、ということが問題になる。陳寿はおそらくこの行列のくまりを、それを目撃もしくは依頼した何らかの記録ないしは所伝に拠って綴ったのであろうが、彼の意圖は胡人燒香の圖を通じて士燮政權の威力を描き出すことにあった。したがって胡人はインド人、燒香は仏事という考証に止まることなく、これらを士燮政權全体の把握に関わるものとして考察をすすめていかねばならない。(尉他との比較の句は後節で触れる。)

純く本伝の記事は、建安年間中国諸勢力が交州を見る目と、それに対応する士燮政權の関わり方がより上げられている。本文は省略する。当時の中国政局の微妙な推移を考慮しながら、私なりに本伝の記事を略述するところのようになる。

建安初年に朱符が放逐されたのも、漢廷が派遣した交趾刺史張津が部將區景に殺されたのは建安十年(A.D. 205)頃であった(《通鑑》同、《國漢書》方鎮年表(二十五史補編卷二)と《所収》による。《孫氏論》(《孫氏論》)と)。きには荊州の牧劉表は建安五年以来荊州南半を鎮撫したその余勢を駆って、部下の賴恭を張津の後任として交州刺史に、また蒼梧の太守史瑁の後任としてこれまた部下の呉巨を後任として送りこみ、交州の支配に着手した。漢廷、というよりは獻帝を擁立している魏王曹操は、これが宰相の

ために士燮を起用したのである。すなわち「通」賊劉表、賴恭を遣して南土を看固す。今、汝を以て越南中將郎となす。七郡(交州)を管督せよ。交趾太守を領すること故の如し。至是の職書が与えられ、士燮またこれに応じた。当時長江下流域の孫氏勢力は、兄孫策の死後(A.D. 200)を受け継いだ孫權が専ら江東の調定にいとまなく、交州に勢いを伸ばす余裕はなかった。こうした華北・荆・揚の力關係を秤量しつつ、己の勢力維持を有利に導びく邊境が士燮側にはあった。

建安十三年、この勢力状況が大きく変る。第一に八月劉表が死に、荊州は戦わずして曹操に降った。劉表派遺の刺史賴恭と蒼梧太守呉巨との間に確執がで、ついに呉巨が賴恭を放逐したのは、荊州のこの急変に關係がある。その呉巨と旧知の關係で当時劉表の宿客であった劉備は身のふり方を魯肅に尋ねられて呉巨のもとに身を寄せたいと答えたのはこのときのことだ。第二に、秋赤壁における孫權側の勝利。ここで曹操は荊州經營を断念し、孫氏は長江流域を確保して荊州を南北に分断するとともに、益州(四川)をも指向する姿勢をとった。以後越南に孫氏の手が伸びてくるのである。

赤壁の戦いは孫氏の対北方關係を大きく転換させた。翌々建安十五年(210)に孫權派遣の交州刺史歩騭が越南に乗り込

んで威武を示したとき、士氏兄弟は挙げて「節度を奉承し」、呉と密着した。士氏にとって自己の勢力維持のため

の当然の行為である。歩騭は呉巨を殺す。益州に入った劉備集團に対する士氏の提携は全く無い。最小の勢力に苦しむ劉備に賭けてことさらに手を握る意志も義理も南方には何ら無かった。のみならず呉の意向を休して建安二十三年(A.D. 218)には蜀の支配下にあった益州郡の豪姓雍闓らを呉に東附させる橋渡しを士燮みずから演じているのである。かくして孫氏に毎歲南海の珍産貢賦を絶やさぬ士氏一族は、呉への帰服固くかつ本領安堵しつつ黄武五年、士燮

の死を迎える。

百蛮を威服せしめたほどの勢威と評価されている士燮政權と、以上見たような北方諸政權、ことに呉との結びつきを通しての士燮政權とは、どのように無理なく結びつけられるべきか。ここにわれわれはこの政權の持つ性格を探る。条目が与えられているように思うが、同時にこの課題は、先に挙げた中国人土がまさに暗躍していたことと折り重なるのである。政權の性格は、以上の諸問題を逐一検討し、士燮死後の士氏と呉との關係を見た上で、最後に取り上げたいと思う。

士燮伝のこれまでの検討の中から摘出された問題点を整理すると、(一)、交趾に集った中国人士の行動を、越南社会

士 燮 (後藤)

の立場から調べ、それとの關係を考察すること、(二)、インドとの交渉關係に関連して交趾社会と士氏政權との關係を把握すること、(三)、対北方關係ことに呉との連結の中にどのような士氏政權の性格が露呈されているかを念頭におくこと、である。そこで以上の三点を柱にして、越南史上における士氏政權の性格・その基盤・およびそれを通して政權の歴史的限界性すなわち越南史における位置づけを考えていきたい。

### 三 中国の人士

二・三世紀の乱を避けて交趾に寄集し、ために士燮の學術保護者としての地位を高からしめている「百を以て数える」人士の中で、まず筆頭に挙げられるのは、彼ら好學の徒の中心の座に居たと思われる劉熙である。

隋書經籍志には彼の著述として、論法三卷・孟子注七卷が収録されている。別に釈名八卷の著作があるにもかかわらず正史に本伝は無く、中国學術界で占める彼の位置は必らずしも明らかではない。ただ葉德輝の「劉熙事蹟考」(《觀古堂所著書第一集》)によれば、劉熙は北海(山東)の人、中平年間に徵されて博士となり、のち寇を交州に避けた。劉熙交趾に在るを以て亡命の人士程璜・薛綜・許慈らとはとも

に彼に従つて亡ぶが、その卒年はまさに呉の赤烏年間(248-257)に属する(『三國志』)にあるべし、と記している。

張氏が劉熙の死を赤烏年間としたのは根拠の薄い臆測にすぎない。かつその死処も明らかでないけれども、かりに赤烏年間まで交趾に存命していたとするならば、この篤学の士は初平の頃に交趾在住以来、太守士燮の庇護のもとにその学究生活を続け、黄武五年士燮の死とともにこの士氏政権の崩壊を目のあたりに見、政權を接収した呉の支配下に在つて引き続き學術活動を怠らなかつた、ということになる。彼の学究生涯のおそらく大半を占めている交趾の生活環境にもかかわらず、そして士燮が學術愛好者であつたとあれば、口伝されていくにもかかわらず、大師劉熙の名が士燮政権に關する史料に直接的に現われていないのは、どういふことか。彼の学問によつて、地方政權の興廢交替の如きは何らの意味も關わり合ひも認めない、といったような交趾における存在であり、彼の生活行動であつた、とでもいふのであらうか。

この頭字「劉熙」に就いて交趾で大義を考論してついに五經に通達した(『程康』、汝南郡南頓の人。程康もおそらく初平の乱に交趾に亡命した人士である。彼は太守士燮に仕えて長吏となつたが、のちその學識を買われて孫權に徴され太子太傅となつた。權の子の孫登が呉の太子となつたの

は黄初二年(212)であり(『吳志』)、黄武四年に程康は明らかに太傅として発言しているから、彼は士燮存命中に交趾を去り建康に赴いてしまつたことになる。

同じく交趾に在つて「劉熙に師事」した南陽の人許慈は、赤壁の戦い後まもなく交趾を去つて蜀に入り、劉備定蜀ののちその博士となつた。許慈の入蜀は劉備入蜀の建安十六年以前であつたと思われる。それは彼と行を共にした許靖が建安十三年以降に巴・広漢の太守、ついで十六年に蜀郡太守となつてゐることからわかるのである。(この間の論文を参照されたい)。

この許靖についてはなおも語るべきことがある。汝南平輿の人許靖は、はじめ親屬とともに会稽に移住して太守王郎にたよつたのであるが、建安元年孫策が会稽郡を侵圧席捲して江左に覇を唱えたとき、同郡の多くの人士がさうしたように彼も家属もろとも交趾に移住した。太守士燮は彼を厚遇したという。しかし許靖はその十数年後には交趾を去つた。呉の支配下に交趾が組み入れられてゆく状況(『建安十五年前後』)が許靖・許慈らの去就を決定した時期であつたのかも知れない。

ところで許靖の交趾における言動は、袁徽によつて漢魏政府に簡拔けに伝わつてゐた。袁徽は陳郡扶樂の人、「儒者の登高、天下乱るるに及び(初平の乱)難を交州に

避け、司徒が引っぱらうとしたが応じなかつた」といふが、彼は交趾に在つて、中国の亡命人士および士燮政權の動向を漢魏の尚書令荀彧に報らせていた、と思われるフシがある。荀彧は炎漢の臣を以て自から任じてはいたが、所詮その客觀的役割りには曹操の幕下における張子房であつて、建安初年以降十七年間尚書令つまり官更任免の要職に在つた。この荀彧に交趾から送つた袁徽の書簡が二通だけ三國志に収録されている。一は先きの士燮を賞め上げた書簡である。これは、みづから庇護を受けた彼が、交趾の士府君を恩恵をこめて写したその表現である、というだけでは済まされないものがある。というのは許靖伝に見える今

一つの書簡は、許靖の行状を記すとともに彼を魏に任官させようとする推薦状であり、またこれによつて荀彧は許靖に仕官を薦通する文書を出しているからである。許靖はこれに返書して彼なりの所見を述べ、任官を固辭して蜀に赴くのであるが、このようなやりとりを見ると、袁徽の交趾における役割りがおぼろげながら推察できるやうである。

彼と荀彧との間にはなにか意圖的な工作がなかつたであらうか。彼が報ずる士燮論評の中にも、ある種の意圖に基づくものがなかつたであらうか。彼は士燮ならびに交趾在住の首を以て数える中国人士の動向を荀彧に報らせていたのではないか。でなければどうして許靖推薦状を本人の意

にかかわりなく彧の許に送つたであらうか。袁徽は、ある意味では交趾における漢魏政府のスパイの役割りを行つていたのでないか、と思われる。先に見た士燮伝の「汝の太守の地位は安堵せしめる、太守ではあるが七郡を統轄せよ」との漢廷の通達は、尚書令たる荀彧の手を経たものである。とすればこの場合、袁徽から受けた書簡が尚書令の士燮認識の拠り所となつてゐたと思われのである。かりに発信者の意圖がさうでなかつたとしても、荀彧側で政策的意圖を持つて受けとめられていたとすれば、このような書面史料だけで直ちに士燮の評価を決めることは困難であるといわねばならない。

会稽余姚の人虞翻は太守王朗のもとで功曹をつとめ、孫策の江東制覇ののち呉に仕えた。しかし硬骨漢の彼は孫權と激論の末「ついに交州に徙された。」けれども「講学倦まず、門徒つねに数千人、かくて老子・論語・國語の訓注をつくり」「在南十余年、年七〇で交州に没し、その亡きがらは故郷会稽に帰葬された。」虞翻の死は嘉禾元年(213)である。若梧郡孟陵県においてであつたといわれ、その在交州間は士燮晩年期と折り重なるものの、交趾郡治に居たかどうかは明らかでない。しかし彼は交州のどこに徙されてももっぱら呉の對外政策にたえず口を出してゐたやうである。虞翻が死んだとき年十六であつた南海(広州)

生まれの四男の虞汜は永安初年(A.D. 258)四〇才で選曹郎となり、建衡元年(A.D. 269)監軍として交趾に渡り、呉晋の交趾争奪戦(後述)に呉の部将として活躍し、その功によって交州刺史を拝命した。なお翻の父の虞詡は桓帝のとき日南郡太守になったといわれる。三代にわたってそれぞれ越南に關係を持った虞氏であるが、以上の行動から見て、學術を交州で講じて、晋と覇権を交趾で競つても、この一族は本来交趾に定著しない会稽の名族であり、その意味では越南社会には基本的には無縁であつたといえよう。同じことは虞汜と交趾で戦塵を共にした陶璜(丹陽秣陵の人)の父子孫三世にわたる交州刺史としての越南へのかかり方についてもいえるであらう。

最後に薛綜(沛郡竹邑の人)の場合。彼はわかくして族人とともに交州に避難し、劉熙に師事した、という。あとで取り上げる彼の孫権への上疏文によれば、少なくとも朱符が交州刺史に在任の初平―建安初年には彼は交趾に移居していた。そして建安十五年まで交趾で生活したのち、孫権に召抱えられて呉の五官中郎となつてゐる。黄武五年士氏勢力の解体後は、その十数年間の在南經驗を買われてか、交州刺史呂岱のもとで合浦・交趾の太守となり、呉の南綏事業に邁進した人物であり、子の薛翊も虞汜とともに交趾で西晋勢力の打倒に尽力した。越南社会に持つ薛氏父

子のイミも虞翻父子と同系列に属するようである。

劉熙をはじめ程秉・許慈・許靖・袁徽・虞翻・薛綜と、以上中国側史料にとどめられた在交州中国人士の具体的な行動を一括していえることは、彼らはすべて越南に定著する人物ではなかった、ということである。亡命避難の人士はそれぞれの都合で交州に遊び、それぞれの都合で交州を去つたのである。たとえ在南中に死んでもその骨は生まれ故郷に埋葬されたのであつて、当然のことながら彼らの越南社会を見る目は、何年住んでも定著の人々とは基本的に異なる観察であり、その上に立つての思考・行動であつたといつてよい。越南に定留していた彼らが越南社会をどのよう把握していたかは、次の薛綜の上表文によつておおそ窺い知ることができるであらう。

むかし交趾太守錫光・九真太守任延は中国式の礼教習俗を越南に導入した。その効果は頗しは上つたかも知れない。しかし自分がかつて交州に寄留したときの見聞によれば、たとえば珠崖では郡県の治所を除いては婚姻の在り方は全く自墮落であり、交趾郡廉冷県・九真郡都龐県では兄死して弟が嫂を妻とする習俗で、役人もこれを禁制できない始末。日南郡に至つては男女ともに裸体でそれを恥かしいと思わない。全く虫ケラ以下である(可謂虫多有觀面目耳)。越南では中国教化の効用を期待す

ることがそもそも間違つてゐるのではないか。その上、土地は広く人口は多く、風土も中国人には住みにくく、そこに反乱が発生すれば鎮定に手を焼く、ゆえに地方官はほどほどに租賦を取るわけである。しかしながら田租のほかに交州には特産が有る。名珠・香葉・象牙・犀角・玳瑁・珊瑚・琉璃・鸚鵡・翡翠・孔雀のたぐい。これ有るがゆえにかならずしも租賦の収奪だけに目くじらを立てる必要はない。越南の奇物珍産が中国の利益となるのである、……

越南の地はおよそ中国礼教の及ばぬ文明化外の社会である、という前提に立つて、しかしながら越南は珍産の集散地であるがゆえに中国において必要だ、という意見である。彼にとつて越南とは、ただその地の物産だけが価値を持つてゐる。越南の住民などは虫ケラ以下、というのである。外からの為政者としてのこの意識の中には、越南社会に対する一片の連帯もなく、その社会の上に立つ士氏政權に対する一片の愛着もない。十数年間交趾に在住した彼にして然り、その彼が師事した劉熙の面目もまた窺知できるであらう。

この上疏文からうかがえる対越南意識が、おそらく劉熙の周りに集まり散ずる中国の人士に共通するものであつたろうことは、以上の彼らの言動に照らして明らかである。

このような一団の學術グループは、そこでどのような高論卓説が闘わされようとも、越南社会の發展に寄与する意識などは微塵もなかった、といつてよい。いみじくも袁徽が筆したように「われらは羈旅の人」つまり越南社会にとつては根なし草の存在でしかなかった。もちろん彼らがその學術を越南社会に植えつけた事実はない。中国人士の行動は越南社会にとつて本質的に何らの寄与もなしえなかつたのみならず、逆にその意識は―薛綜に典型的にあらわれているように―越南物産の支配を重視指向していた。したがつてこれまでの士變評価が、士變伝の本文の字面によるところの一方的(中国側からの)な理解にすぎず、以上の中国人士の交趾における具体的行動を知る限り、彼らの士氏政權評価は越南史にとつては標準的なものとはなりえない、ということがわかるであらう。またこれら中国の人士たちは―彼らを士變政權の立場でどう位置づけるかという点の考察は排除してはならないが―士變政權を真に支持する者ではなかつた、ということがわかるであらう。では士氏政權を支えた真の基盤は何か。

#### 四 士變政權の性格

##### 1 政權を支えるもの

ここで士變出現以前の越南社会を見わたすと、一―二世

紀にかけて中国から移住し定著して越南社会の構成員となつた漢人の存在が指摘される。それと併行して二世紀以降の北部ヴェトナムには、戦前の調査であるが、数多くの漢式磚墓が出現している。磚墓はその地域の支配者層の興津城であるから、ここに漢人土着支配者の存在がうかがえるのである。私はさきに土爰政權以前の二世紀の越南社会における移住定著漢人の在り方について考察した。越南に移住定著した漢人は、越南社会の一員として、自己の生存を賭けて中国支配を受けた。したがってまた反乱行動をとつたのである。<sup>(註2)</sup>そして漢人移住集團は、磚墓もまた三世紀にわたっているように、中平・初平以降もあとを絶たなかった。江左が孫策の領有に帰したとき(二〇〇年)、会稽郡では家属ぐるみで交州に走つてその難を避けた人々が多かった。その中に雜つて家属を先登させ自からはそのしんがりをとめた、というので許靖は大いに世評を博したのである。<sup>(註3)</sup>この蜀志許靖伝の記事には、許氏の背後に言動逸事が記録に残らぬ数多くの交州移住団がうかがえる。彼らの中には、交趾からやがて蜀に去つた許靖とは別に、交趾に定著した土爰政權の者も数多くいたであらう。彼らは一世紀以降移住定著した漢人たちと同様、越南社会に自己の存在を賭けて生きる人々である。その中には土地占有者となつて農民を収奪する在地有力者もいたであらう、しかし越

南の住民はひとしく編戸の民としての利害の上で郡県支配に抵抗する基盤を共有していた。そしてこの基盤に立って定著漢人をも含めた越南の市民は、東漢派遣の郡県官僚や鎮庄に來交した將軍刺史に対して激しく連帶抵抗したのであつた。

土爰も郡県官僚の一人である。しかし彼には、交州で私腹を肥やし、その蓄財を傾けて昇進転任を図る者、私財は蓄積しなくとも、専ら取俸を正常化しやがてそれが榮転につながる中国派遣の地方長官にくらべると基本的に峻別されねばならぬ点がある。士氏が蒼梧郡広信県に定著し、土着豪族となつてからすでに年久しい。その太守土爰は外來太守とちがつて嶺南社会の利益を自からの生存基盤とする土着漢人豪族であつた。士氏のような定著漢人支配層は交趾をはじめ嶺南各地に存在していた。彼らを含む住民層の支持の上に太守として臨んでいたのが士氏政權の在り方であつたと思われる。

土爰は黄武五年に死ぬまで太守として四十年以上交趾に在任した。弟の上登は建安初年以降合浦太守を、九真郡守・土爰もまた士氏没落までの任に在つたらしい。郡守としての長期在任と隣接三郡太守を兄弟で占めているという形勢自体が兩漢期を通じて他に例を見ずすでに異様である。一郡守の半世紀にわたる郡守在任だけでも郡県体制下で率

直に客觀視すればもはや郡守とはいえない。しかもそれが兄弟三郡にわたる状況は、名は東漢の太守でも、その実は宛然一個の獨立王国といふことができる。このような政權が可能であつたわけは、中国側からすれば建安年間の政局混亂、辟陋の地に対する無統制の結果、ということになるが、しかしそうした外的条件だけでは政權は維持できない。維持存続の内在的条件を土爰政權そのものの中に、それを支える越南在地層の中に求めるべきである。すなわち士氏の土着的性格が、それと顚覆の越南社会土着有力者層を含む住民の支持を受け、そこに当時の中国政局の諸条件がからみ合つて、政權の異例の長期存続を保つた、と理解すべきであらう。土爰を支持する在地有力者の具体例はきわめて乏しいが、交趾郡中桓氏(後述)の例はある。また土爰死後の交趾制圧に赴く呂俗に、或るひと、謂いて曰く、土爰は累世の恩を藉りて、州附する所あり。宋だ輕々しくなし易からざるなり。<sup>(註4)</sup>と自重をうながしたその指摘からも、士氏政權の在地的性格に依附した土着勢力の状況が読み取れるであらう。

土着勢力に支えられたこの土着的政權を支えている今一つの重要な側面は、南海物資をその支配下に収めていたことであらう。建安十年後に七郡軍督の璽書を受けた本伝の条に、土爰は「天下喪乱して道路断絶せしも、貢職を絶や

さなかつた」とか、同じく建安十五年呉の配下に入つてのちには、「孫權に送る多量の雜香・細葛、明珠・大貝・流離・翡翠・珊瑚・犀象・焦邪・龍眼の珍産奇物、最として至らざはなかつた」<sup>(本伝)</sup>という。これらの物産は南方諸郡の資源でなければ交易によつてさらに遠方からもたらされた物資である。同じころ合浦太守士登は「馬數百匹を孫權に貢した」<sup>(本伝)</sup>この貢馬は河川路によつて開かれていた内陸交易によつて、たぶん雲南方面から入手したものと思われる。こうしてみると土爰政權は南方の交易を掌握して油然たる經濟力を誇つていたかに見える。そして当時の交易を示す一断面を、本伝にいう交趾郡治遼編城における士氏の行列光景に見ることができると、先述のように太守土爰が官寺に出入する際「胡人の轂を夾んで燒香する者、常に數十有り」から、交趾に当時すでにインドから仏教が伝わっていたことがわかるのであるが、胡人とはインドの仏僧だけではない、インドシナ半島をめぐる沿岸貿易路線によつて南海の物産を交易し交趾に在住するインド商人も含まれねばならない。

康僧会といえど交趾出身の、中国初期仏教史上の高僧であるが、彼の父は天竺の商人で商いのため交趾に渡り、ここに定著した。その両親を年十余才で失つた彼は、出家して研鑽を極め、赤烏十年(二〇〇年)健康に杖錫して仏寺

を開いた(高僧伝)。その父母が交趾に在任し、康僧会が交趾で幼時を送り、出家・修行した期間は士燮在任期と重なり合うであろう。やや後例になるが甘露元年(二二二)に支那と接は法華三昧経を交州で訳出した(歴代三寶記)同じころ交趾一着僧で論陣を張っていた宗教思想家牟子もいる。交趾の社会一般に仏教が普及した状況は明らかでなく、また支配者層の中にその統治方策と提携共存する形で仏教がどれだけのこんでいたかも不明である。天竺からの移住者の子が交趾で出家していることから推して、交趾商人層の中にある程度仏教が滲透していたこと、交趾には修行可能なほどの仏教環境が在ったこと、が推察されるにとどまる。仏教の定着が民衆社会の一定のエネルギーを結束させる要としての期待を、当時の交趾において見出そうというのではない。そうした状況や動向はない。ここで指摘しておきたいのは、以上の零細な仏教関係記事を通して、南海貿易を己れの特殊な基盤として持つ士氏政権の勢力についてである。そしてこれがまた単なる郡守社会とは異なる自立的状況と意識とを醸しだす基盤でもあった。士燮の死後、呉は新任太守を送り込もうとした。しかるに士燮の子の微はかつてに交趾太守を自署していた。郡県官僚職を父子相継ぐこと自体がおかしいことはいうまでもない。これは士燮の無能と不見識を示すものであるが、同時

にこの行為の背景に、郡県制のクセマエを失念させるほど、交趾太守四十余年間に蓄積した遺産のほどがうかがえないであろうか。

これを要するに、郡守としての異質性―士著性―に立ち南海物貨交易に支えられていたのが士燮政権の勢威の基本的要素であった。「一郡を保有して疆場事無き」治安を出現せしめた政権の基礎は、したがって士燮が学術に博識であったことに在るのではなく、ましてや「羈旅の」中国人の寄与でもなかった。二世紀以来漢人定著者をも含んで発展しつつある越南社会が、二世紀末以降政局を示した中国統治に相応じたところの、これは政相であつたと思われ

るところでこの「一州萬里に偏在して、威尊この上も無かつた」勢力が、士燮の死とともにあつたけなく解体されてしまった事実はどう把握したらよいか。この点を検討することによって、士燮政権の性格はより明確に把握されるであろう。その考察のためには、ひとまず士燮本伝の末章を中心に政権解体の状況を見ておく必要がある。

## 2 没落をめぐって

北方の政局混乱を窺望しつつそれとのバランスをとりながら政権を保持して半世紀にわたった士氏勢力は、その上

着的、性格からして、士燮の例に見たように、その中にややもすると内包する自立性を露出するものがあつた。このように士氏政権の体臭は同時に北方政権との接触においてマインスに作用したよつである。中国政権は南方物貨の直接的支配を伝統的に指向している。漢武以降の諸南部県支配はそのあらわれに外ならない。されば、南海貿易を掌握し、かつ土着の性格をもつこの地方政権は、北にとつては郡県支配を逸脱するものと映じたであらう。ただ、魏は前州勢力牽制のためには士燮政権をば処遇宜しきを以て醜書せねばならなかつたし、孫権は北に強敵をひかえて、士氏勢力をやがては解体すべき目標と定めたがらも、あえて手を出さない。その呉とあえて勝負するような雄図などは士燮には無かつた。(何故無かつたかはあとで考えるとして)ただから、北方の政局動向情報をおそらくは寄留の中国人士たちからも得て、漢魏について呉に傾斜して貢物を意し、士氏勢力の延命維持に腐心していた。これが建安年間を通じて彼の死に至るまでの状況である。

士燮が病没した黄武五年は魏ではその五月に曹丕(文帝)が没した。蜀は前年雲南平定から凱旋した諸葛亮が陝西・山南方面への出陣準備に余念がない。二国対策に余裕の生じた呉にとつては士氏を倒す絶好機であつたといえよ

う。直ちに孫権は嶺南七郡を広・交二州に分割した。二州は士氏勢力を解体するとふたたび合して交州に復しているから、分割策はひとまず士氏政権処理がねらいであつた。これは赤隴に代つて延康元年(二二〇)に交州刺史となつていた呂岱の建策による。呂岱は就任後合浦郡高梁の賊を降し、鬱林郡の夷賊を破り、南海郡境に跳梁する甘陽・滇陽の賊を討伐していた。この実績に立つてであらう、これら平定四郡を広州として呂岱みずからその刺史となり、海南の三郡(交趾・九真・日南)を新交州として刺史に呉將臧良を任じ、しかも士燮に代る交趾太守に校尉陳時を任命し、士燮の子の士微を九真郡太守に新任する、という策である。のみならず合浦太守士壹の子の呂岱と相知の間柄、合浦郡を新設広州内に編入して士氏を分断するともに、九真郡太守はそれまで士翬が任じられていた士氏勢力を競合させるこれは対策である。

士氏側にしてみれば呉政府のこの方針は一方的だ。名は呉下の太守ではあるが連年貢物を贈つて絶やさず、二郡に牢固たる勢力を築き上げてきたその基盤がいま一朝にして失なわれ、九真一郡に逼塞させられてしまうのである。しかも九真郡の治安はかならずしも安定しているわけではない。士燮もかつてその地の反抗に手を掛けた経験を持っていた(呉志・士燮傳)。何れにせよ呉の措置は屈服しかね



る。そして士氏が反抗に出ること自体が呂岱の思ひ盡でもあつたろう。

ここで士氏の内部および士氏を支持する在地有力者層の間で、この問題をめぐって対立が起つた(後述)。この状況下に呂岱は広州から晝夜に馳せて交趾に入り、士徽に結集して呉の命を受けず、宗兵を合して己れの既得権を守る反抗派に、士国を遣わし、「呉に従うならば士氏は郡守の職を失なつても族誅はしない」と言わせておびき出し、にわかには士徽兄弟六人を執えてことごとく伏誅したのである。士徽の越南における直系はかくして絶えた。<sup>(以上本伝)</sup>

ここで呂岱の行為を積極的・消極的に支持する士氏の何人かがいたことは注意を要する。呂岱計略の手先になつた士国はもとより、その父の士壹、壹の弟顗、この事件に巻き込まれていない士徽の子の廉(呉の武昌太守)は、このとき官位を剝奪されるにとどまつてゐるところを見ると、少なくともこの時点では親呉派であつた。(壹と顗は数年後に殺された)。ところでこのとき士氏内部の分裂に主役を演じた士国は、刺史呂岱の「師友従事」となつてゐるから、「学問上の」相知であつたと推察される。国の父壹は、士徽本伝によれば兄の士徽同様中国の教養を身につけて、中平四年(初平初年)の間洛陽にいた人物である。してみると士氏内部の分裂には中国學術に關連する北方との

つながりが指摘されうるであらう。そしてその種は外ならぬ士徽が播いたものである。

太守士徽は、たびたび述べたように、嶺南在地の士豪であり、それ故に嶺北から派遣され治功成つて昇転する一般の守令とは基本的には峻別さるべき地縁性を具有してゐた。それとともに一方では、東漢支配下の豪族の子弟として、中国式教養を身につけ、中国支配者としての意識を具有してゐた。この点彼ほどこまでも中国の守令として、洛陽を尊上し、建康の支配下に甘んずる良吏の意識を持つて行動し、そこから逸脱するものではなかつた。その限りでは薛綜らの中国官僚意識と共通性を持つものであり、したがつて自己の政權がどのように豊大な勢力条件を具備してゐようとも、中国からの分離独立などは、春秋・尚書に裏打ちされた彼の教養意識では思いも及ばぬことであらう。ここに士徽政權の限界性を見出すべきではないか。彼は現実には嶺南定著の有力者として越南社会の利害を負うて疆場事無き治政に終始した。治績の素因は彼の士著性に在つて、その中国學術には無い。後者の因子が具体化して學術保護者交趾の士府君の名を中国に流して高め、それが对中国的には彼の政權維持に多分に寄与した面があつたといへ、中国とのそのようなつながりが結局は政權の命取りともなつた。この内在する自己矛盾が士氏崩壊の悲劇と

なつて黄武五年に具象化したのである。

一方この政權を支持してきた士著有力者層の行動も見逃してはならない。士徽の死後、呉の士氏取りつづしの方針に對抗した士徽に向つてその暴挙を諫めたのはかつて士徽が善用した郡吏恒鄰であつた。このために恒鄰が若殺されると、鄰の兄恒治・鄰の子の恒発らは族兵を合して士徽を攻むること数日、勝敗決せず互いに和約して兵を解いたといふ<sup>(本伝)</sup>。この事件をきっかけに呂岱の進撃が始まるのである。この限りでは恒氏の行動は客觀的には呉に利するものであつた。恒氏はなぜこのような行動をとつたのであるのか。ここには士国のような「学問上」の結びつきは見出されない。しかも恒治らは、呂岱が士徽兄弟を誅斬したのち、徽の大將甘鳳とともに吏民を率いて呂岱に反攻してゐるのである。この反攻は呂岱によつてたちまち鎮圧されてしまつたが、それにしても恒氏らの以上の行動はどう受けとめたらよいか。

私はこの一見矛盾した在地有力者層の動きの中に、当時の越南住民の支配に対する在り方が示されてゐると考へる。彼らにとつて郡県長官は本質的には彼らを取奪する支配者に外ならない。士徽といへども例外ではない。ただ士氏政權が越南性を持ち適応の収奪に終始したであらうが故に治下に反乱なき四十余年を過した。これは当時の嶺南

他郡(鬱林・蒼梧・南海)に連続する反抗・鎮定のくり返しにくらべれば一目瞭らかである。しかし郡守ほどこまでも郡守であつて、編戸の民の収奪者に対する不安と疑念は解消することはない。士徽の死、士徽の反抗とともに予想される戦火が必らずや彼らの生活を脅かすであらう考慮から、彼らは士氏の抗吳策に反対したのではないか。彼らにとつて支配者士氏は全能者ではなかつたのである。しかし彼らは呂岱の進撃振りを目のあたりに見て、より始末の悪い新たな収奪者の出現を知つたとき、自からを守るために「吏民を率いて」反抗した。つまり彼ら交趾の吏民は、自己の利害の上から将来を予想して、士徽に反対し、つづいて呂岱に反抗したのである。そして彼らの見通しの上に士氏が推戴され得なかつたまさにその点に越南史上における士徽政權の持つ限界性すなわちその占める歴史性があると思われる。

要するに士氏の悲劇はたんに一大姓のそれではなく、広く当時の越南社会そのものに根ざすものであつた。士著的士氏政權を支持した越南の吏民は、より好ましい郡県支配者を支持する意識から逸脱するものではなかつた。中国支配から明確に分離自立する具体的行動は、その方向線上を歩みながらも、充分一時的に結集されないう越南社会の当時の状況であつたと思われる。越南社会が強固な結束力を

以て中国支配に抵抗するためにはその指導者を自からの社会の中から出現せしめる状況が具備されねばならず、それは六世紀以降の越南においてこそ見出されるのである。

郡県支配を排除する潜在的エネルギーを越南社会は二世紀以来発散させていた。越南の住民は土爨出現以前に、外来官僚の支配に反乱をくり返した。土爨の四十余年、同じ方向で彼らは政権を支持した。そして呉の支配が開始された時点以降、同じ方向で反乱がくり返されていくのである。

呂岱は土氏勢力の右のような弱点を知っていたが、それとともに土着住民の反乱に結集する力も認めて充分に警戒していた。だから、いま稽留して、速やかに事を運ばなければ、彼らに異心を生ぜしめ、城守を固めさせ、ひいては七郡の百蛮雲合響應せん。そうなるのは智者ありと雖も誰かよくこれを図らん。信伝(呉志呂岱伝)とて、奇襲戦法に出たのである。この百蛮響應の潜在力こそ呂岱の最も懼れたところであり、この力こそが越南自立の根幹基盤となるべきものであった。彼の懼れは黄武五年土氏勢力解体の時点では事無きを得たが、しかし南方土着の反抗力そのものを拭き去ったのではない。したがって土氏一族の権力が解体したことは、呉の越南支配が順調に展開されることを必らずしも約束しなかった。呉は上豪政權土氏に代って越南を領有し

たとき、その支配の困難さを改めて思い知らされたようである。呂岱は黄竜三年(A.D. 233)まで「南土清定のため」交趾刺史の任を離れることができなかった。そしてこの武庄一点張りの刺史のあと、呉は交趾の反乱にふたたび悩まされなければならなかったのである。

## 五 土主論評

呉士連は大越史記全書に「土紀」を建てた理由をつぎのように述べている。

土王の時、守任有りと雖も、然れども王は諸侯を以て国に当る。国人皆呼んで王と為す。守任はただ虚設たり。

而して王の貴重たる、百蛮を威服して趙武に下らず。後代王爵を迫封さる。故に表わして之れを出だし、諸王と同じくす(首凡例)

土爨は交趾太守であったが、その実力は優に「国諸侯」なみで、しかも国内では王と呼ばれていた。交州刺史なんぞはあつて無きが如き状況であった。だからその実質性を買って歴代守任の項から外し、土王としてその四〇年間を越南史上一つの王國期とする、というのである。全書の原型である景文休の大越史記は今も伝わらず、史記を簡略にしたものであるうといわれている越史略では、土爨は歴代守

任の項目内にとどまっております、その限りでは大越史記にも土王の項目は無かつたと思われる。

ところが越史略の土爨記事中には、その前半は土爨を「爨」と記しながら、後半の死以後については、

魏黄初七年(即景帝武宣年)、王、薨、壽九十、在治四十余年、係權臣王死、……以陳時代王為太守、王子徽等發兵……

と、爨ではなく「王」と記している。これについて山内晋卿氏は「越史略の著者當時に先立ち土氏を王に祭り上げねばならぬ心持が伝説を産み、その伝説に引きずられてかくの如き前後支離の記述を敢てした」と述べている。(山内氏注)越史略が書かれた一四世紀後半以前までは土爨が王と呼ばれていた「伝説」はあとで取り上げるとして、二〇三世紀の在任當時に國人から王と呼ばれていた根拠を、殆んど同時史料である呉志本伝の中で見出すことはむづかしい。われわれは前節までに本伝を中心に土爨政權の性格を考えてきた。たしかに王と呼ばれるにふさわしい勢威を持っていたことは事実であるが、それにもかかわらず王と呼ばれたたしかな事実を取り出すことはできない。何よりも儒学に基いての太守が王を自称することはまず無かつたと見てよい。強いて本伝の記述に即して臆測すれば、かの胡人燒香の図から、胡商が外国の主權者を王と呼んだかも知れない。(山内氏注)

「(土)論評」と想像できる程度に止めて置く。

そこで「土王」の論拠を土爨本伝で探るかぎり、本伝の記述そのものの、ことに土爨と尉佗との比較が問題になる。

南越王尉佗は漢の属臣でありながら、国内では武帝を自称していた(史記南越本傳)。兩者を比較して、しかも「尉佗にまさる」と評する以上、太守土爨はせめて「王」と呼ばれていなくてはバランスがとれないではないか。このあたりが「土王」成立の史料上の根拠になっているようだ。

ところでこの「尉佗」といへども臨めるに足らずの諸侯は曲者である。そもそも時代を隔て状況もろが人物の勢力についての優劣の比較自体が、じつは生産的な議論ではないのだが、かりにこの場合優劣を争っても、じつは無意味である。なぜなら、第一に実力の点なら南越王趙陀の方がはるかにまさっている。実力の評価は相対的なものでしかないが、彼は漢初の政府に抵抗して自己の領域を離らず、呂后稱制時の漢兵侵入をしりぞけ、帯甲百万を誇りして、閩越・駱越を従属させ、呉王濞とも氣脈を通じて、南越國の存続保持を企図しているのである。こんな行動は土爨伝には見出されない。その土爨伝を作った陳寿が、この比較の無意味さを承知していない筈はなかつた、と思う。

そこで第二に、にもかかわらずあえて「尉佗以上」と特記したのは何故か。思うにこれは、陳寿の失筆である。袁徽の書簡中の、「蠻獠の河西を保つと雖も、尉佗を以て之に

加えん」の美句に「ひきずられた失美句ではないか。たとへばこれに引かかつてマダムに両者の比較を云々したところから余り意味は無さうである。――それはともかくとして、このように本伝の記述は、土王形成に役立つ根拠は提供してくれろが、土王呼称を示すものではない。當時王と呼ばれていたことは結局誤としてわかりかねる。

しかしながら、一部疆土を保全した土王は、越史略成立までには強かに王号を冠せられる所伝を持っていた。四世紀の伝説集、男旬幽霊集（上清田著、陳開元注）には、土王の伝を記した中に、州人みな王と呼んで大王と為すの句が見える。幽霊集の中では土王は生時にすでに大王であつたわけであるが、同記事はそれについて、

按報極伝云、王善於拱養、王崇後、至昔末凡一百六十餘年、林邑人寇、掘王陵塚、見王體不壞而色如生、大懼復埋、土人以為神、立廟祀之、呼為土王仙、云々

と土王にまつる神怪記事を挙げて、

陳重興元年、敕封嘉應大王、四年加善感二字、興隆二十一年加靈武二字。

と結んでいる。してみると土王はいつの頃からか幽霊集ではその生存時から土王・大王と呼ばれ、やがて土王仙と仰がれて越南社会で民間信仰の対象となつていたらしく、その実績を踏まえて重興元年以降に国家的保護が加えら

れ、ついに「嘉應善感靈武大王」の称号を得た、つまり土王はこの時点までにすでに完全に越南史上の人物としても土王仙と崇められる存在に化つていたのである。

幽霊集所伝の土王仙の話は、そのまま全書に採り入れられて呉士連の土王評述に定着している。死後一六〇年経つてなおも生けるが如き面持ちであつたというこの話は、多分呉志士王傳注所引の神仙伝の説話がその粉本であらうが、土王本伝に見える土王はこのような神仙性を賦与されやすい面をたしかにそなえている。彼と比較されている趙陀の史記南越伝に見られる現世的開放的な言動・人間像にくらべると、呉志本伝では土王の個性的な言辭は一言も無く、有るのほただ彼を取巻く側からの土王評述である、といえよう。その個性の振りがたい本伝の表現と在任當時の彼の治成・勢威と、当時の中国の道家言流の思調とがからみ合い、神仙伝の重承記事が生み出されたのであらう。またそれを一つの廻り所にして越南社会で土王仙説話が成立・持続し、土王は神仙の彼方に押しやられ、しかも靈威犯しがたい存在として越南社会に生きつづけた、三世紀後半の時点で「嘉應」にして「善感」なる人王の称号をからえたのである。

以上の土王伝説の成立ならびに発展の過程については、なおも考察されねばならない幾多の問題。たとえば土王仙

だけでなく一般に神異的なものの定着展開が越南社会の解明にどう関係するか、といったようなのが今後の課題として残っている。それにしても、ともかくも三世紀の越南社会では土王の靈鎮の効果が信仰対象として認められていたわけであり、この幽霊集で代表されている社会の土王像支持が、全書における「土紀」設定を支える根幹に在つたと思われる。このことは全書凡例で指摘するところの「土王」すなわち「嘉應善感靈武大王」称号成立の次第を考察することによってより明らかにする。

重興元年以来三次にわたつて勅封加字されたのは土王だけではなかった。男旬幽霊集収録の、なんらかの形で民間に伝承された神異化されている古くから史士の英雄豪傑たちは、ことごとく土王と同じ時期に勅封されているのである。たとえば、六世紀に南帝の部将で趙越王を兼ねて独立政權を交趾の地に成立させていたといわれる趙光復、同じく南帝の族将で六世紀末に南帝を擁立し、隋の侵略に屈した李仏子は、何れも重興元年・四年・興隆三十二年に勅封加字を受けてそれぞれ「南道開基聖烈神武皇帝」「英烈仁孝欽明聖武皇帝」と呼ばれ、大・小鸞海ににあるその祠には国家的保護が加えられている。また八世紀後半に安南都護府に安州で抵抗し都府君を号していた馮興も同様で、「重興元年勅封全治大王、四年加彰信二字、興

隆三十一年加崇義二字」かくして福神（氏神）の蓋乎布裕彰信崇義大王となつた。このような一括勅封事情は十三世紀の越南社会が置かれていた状況と対応する。これらの威傑たちが最初に勅封されている重興元年（一〇二〇）は元の第二次侵寇を撃破した年である。同じく一括加字された同四年は元の第三次侵略軍を白藤江上で粉砕した年に当る。越南社会のこの危機的あるいは昂揚的状況と勅封とは無関係ではあるまい。

つまりそれまで民間に流布崇拝されていた越南史上の威傑たちは、民族的危機に直面していた時期にわたつて社会の守護神的な崇拝をますます獲得したのであらう。国家支配者側も挙国抵抗を鼓舞するために、以上のような一括勅封を免合することが有効な手段でもあつた。そして勅封は国家的保護がまた彼らにまつる所伝の民族的色彩をより促進させていたであらう。呉志本伝に準拠し、しかも本伝の事蹟から脱け出した土王もその一員として、威服の面がますます強調されていったものと思われる。

越南最初の通史である大越史記も、同じく元寇という危機的背景を持って、陳聖宗紹興十五年（一一三九）に成立している。この年の五月、元の使者元良は大越国に來り「馬援銅柱の場処を問うた」（（全書卷））元の領土的野心に緊張する時点に土王された史記の編纂纂文体が前記陳寿の失

筆に感嘆されて、「その才勇は武帝（趙陀）に及ばず」と論じながら、しかも士燮について「越南の境土を保全し、二点を評価強調しているのは故なしとしないであろう。史記に一世紀おくれ、陶璽集に半世紀おくれで成立した越史略の文中に、士燮が王と表現されているのもむしろ当然である。一三、四世紀の越南社会にあって、たしかに彼は王として喧伝されていたのである。

五世紀に入ってから明の侵略支配を受けた越南はその貴重な文献を兵火の中に多く失った（『南史』）。また永平十六年（一〇五）七月、明人支配者は「宋りてわが国古今の事跡を思せし書を奪取した」（『宋書』）。こうした状況の中で、大明の支配を排除して自立主権国家回復の事業を成就した鄭氏政権が、仁宗の洪徳十年（一四〇〇）史臣吳士連に撰修せしめて生まれたのが大越史記全書である。全書も史記に似て民族的緊張期をその基底に持つ社会の産物であった。されば呉氏は士燮政権のみならず、徴姉妹反亂期、吳真反亂期等、およそ一時的にせよ主権が越南側に在ると判断される北属期の越南実力者は、これを王紀に列したのであり、またその判断を大きく支えていたのは民間における歴史的評価であったと思われる。

呉士連は「士王生号」「四敵趙陀」「神仙の靈威」後世王爵」のほか士燮の越南史における寄与として「詩書礼

越南社会に根ざす土王評価により多く共鳴した結果であろうと思われる。越南史における士燮は民間の支持崇拝の中に生きつづけており、これが彼を王たらしめたところの基盤であった。要するに越南史に底流するところの士燮に対する民間の敬愛敬重意識に支えられて越史略文中の王、全書の主紀序立は理解されねばなるまい。

越南社会の幅広い各層にわたって士燮を越南の支配者と見なす以上の意識と評価に対して、一方でこれを否定する立場がある。一九世紀の阮氏政権が編纂した欽定越史通鑑綱目（外紀）では「按ずるに士燮は漢の太守たるのみ。宋だ言て王を稱せず。旧史（全書のこと）別ちて一紀と為せども、之れを義例に照らして合せず。今これを削る」とにべもない。スジとしてはもつともである。しかし多くの民衆運動を圧殺して成立した阮氏政権が士王の存在を削除したこととはまことに意味深いものがある。では東漢の太守でありかつ広西の人間であるがゆえに越南主権者と認めることは越南国の自主性と名譽にかけても採るべきではない、とする、これもまた阮氏政権成立後の民族意識の信念に基づいたところの、これは判断であつたろうか。そうではあるまい。強いて言えばそれは国家官僚的意識信念であろう。現行の『大越史記』は全書にほぼ依つた史書であるが、その史記には一八世紀の鄭氏政権下の文豪呉時仕の評言を含

筆を添削せしめて、我國を文獻の邦たらしめた（『全書外紀』）点を取り上げている。士燮政権当時における中国學術の越南社会における寄与は、さきに述べたように採るべき必要はないが、またこのために呉士連を批判する必要もさし当って無い。中国學術をそれなりに受容消化した一五世紀の史官が、越南中学受容史をその時代の知識人の立場でそれなりに主体的に考察した、それは結論であつたからである。

一三世紀以降の国家体制側のこうした編書上の在り方は、それ以前から民間に流れていたところの士王崇拝に相応じて、越南社会における士王の名声を人々の意識に定着させていった。こうした中から士燮の事蹟は歌謡として美化伝誦され、活字となつては大南国史演歌の一節を占めるに至つた。一九世紀に刊刻されたこの演歌を全書とともに参照した清の張璜氏はその著『歐東紀元合表』（一九〇四年刊）で「國人は之（士燮）を愛して士王と曰えり。出入威儀は一に王者の如し。越東通鑑綱目を授ずるに士燮を以て王と為さず。惟だ僭だ（全書主紀の項を削つて交州刺史と為す）。今列して王と為すは大南国史演歌の説に従ふなり」（合表頁）と記し、中華四年（黄武五年の四〇年間）士王支配期として越南史の年表を構成した。清末変革期に生きた張氏のこの選択は、体制側の史書よりも、より広範な

む。そこでも士王紀が否定されているが、呉時仕の理由はずぎの通りである。

当時の人々が士王と呼んだという理由で、士王紀を創るのはおかしい。思うに当時の人々は、それ以前百年に及ぶ東漢の無統制な支配収奪を怨み苦しんでいた、そこに士燮の四〇年に及ぶ良政があつた。その比較の上でのこれは感覚的発想である。そんな一時的な恣慮でわが国の年紀は構成さるべきではない。もつと冷静に事実を見きわめるべきで、そもそも士燮は漢が派遣した一太守である。太守の上には嶺南七郡を統べる刺史がいた。交趾一郡の太守を王とするならば、九真・日南の太守たちはどうなるというのだ。（刺史もまたどうなるか？）

第二に士燮が能く一郡を保全して威尊萬里といわれた彼の勢威治政を王たるの理由とするならば、陶璜三代にわたる、杜瑗四世にわたる、百姓の和を得たるこれら交州刺史も大書して紀に繋げるべきである。（士氏を王とするならば、陶氏・杜氏も王とせよ。）

第三の理由に、士燮はわが国に中国の詩書礼學を通習して文獻の邦たらしめた、という。なるほど彼個人は學に博厚の人物であつたかも知れぬが、それを國人に弘めたという話は聞かない。これは錫光・任延二太守の実践普及にくらぶれば、劣る。光・延二守をだれも紀に繋げ

「もしない」この点でも士氏をわが国の支配者として立て  
る理由は無い」よって士紀を削る。

この呉時仕の見解を、いまここで逐 批判する余裕はない、その必要もあるまい。見ものともらしい論議ながら、三世紀の状況およびそれを含み越南史の発展状況把握を失却した没歴史的思考で、われに問題をすりかえて通そうとする、体制官僚的意識の発想からするところの、これは論にすぎない。ヴトナム史の中で、外からの支配侵略のたゞに民間に根づいていったであろう土王に対する崇敬・評価を考えると、この呉時仕の姿勢の中には、八世紀に高揚する民衆運動に対応するものが看取されるのである。その運動(タイソンを主流とする)を斥殺して政權を掌握したのが阮氏であり、阮氏支配者が編纂した欽定越南綱目の士紀削除の弁は、鄭氏当時の体制側の思考と系譜を同じくするものといふべきであろう。しかし、体制側のこうした欽定規制にもかかわらず、民間に継承された士變の評価は崩れることなく続き、清末の「合表」にも採用されたことは前述した通りである。

士變を越南史の上で独立支配者(王)と認めるか否かの士王論議をめぐって、越南では大別以上のような二つの流れがあった。士王論はこのように三世紀以後の越南史全体にかかわる問題であって、二・三世紀の士變政權の実態を

究明し、それを越南史に位置づける作業とは別個に取り扱われねばならない。しかしそれにもかかわらず士王論で士變を論ずる限り、とりわけ土王の勢威を論ずる限り、二・三世紀の士變政權に立ち戻ってこれを求めねばならない。これまで数節にわたって考察してきたところを要約すれば、何よりもその基底部として士變政權は外來の守任と異なる在土着勢力の一具現であった、ということである。親に、ではないが越南社会に密着するその性格を持つが故に、越南社会で土王が成立し、社会の遺産として伝え続けられていった。

しかし現実には士變政權は脆くも崩壊した。この脆さは、土着勢力を結集して一定の自立範囲を測定するだけの地盤とそれを自覚する意識を必要十分に具備していない当時の越南社会の反映である。越南社会は士變以前から中国の郡県支配に反抗してきたし、士變以後も反抗してゆく。その点では二世紀以降の越南は、中国支配を排除する方向を基本的に指向しつつ進んでいるが、その運動の軌跡を自から明確に意識する状況ではなかった。太守自からがこの点ではむしろ没意識的でした。しかし今一度くりかえせば、蒼梧郡広信県の上豪士氏は、嶺南の土着漢人豪族として、越南社会の支配者として名は太守でも従来にない土着的支配の一つの在り方を示し、それが驛場事無き四十

余年の治政に結果した。これ自体定著漢人の嶺南社会における在り方を具象するものである。それとともに東漢豪族としての教養・意識が郡守として彼を支えていた。ここにまた定著士豪の越南における当時の在り方が具象されているように思える。一方では中国式文物に拘泥意識を持つ支配層を含み、しかも基流として中国支配排除の方向へ進展していく越南社会が二・三世紀の四〇年間に示した現象として、士變政權はヴトナム史の上に位置づけられるべきであろう。

士氏政權が解体して呉の支配を受けた越南では、外來の官僚支配に対する抵抗がふたたび火を吐いた。赤烏十一年(AD. 250)、『交趾・九真の夷賊、城邑を攻没し交部擾動する』(『魏志』)、呉は陸胤を交州刺史に任じた。ときの反乱指導者は九真郡東安縣の女子趙姬であった。しかし趙姬の反乱を「恩信を以て」鎮定した陸胤はなおも永安元年(257)まで「命を銜んで十有余年間」(『同』)交州にとどまらねばならなかった。

永安五年、此の歳察戦をして交趾に到りて孔階(雀)大猪を調せしむ。『同』(『魏志』)同 六年五月、交趾の郡史昌興等反して太守孫諸を殺す。諸は是れより先き郡の上手王千余人を科して建業に送りしことあり。而して察戦至る。復た取られんことを恐れて、故に興等兵民を扇動し諸夷を招誘

せるなり」(『同』)。この事件を利用して、交趾を呉から脱離せしめんとしたのが魏であり、咸熙元年(AD. 260)司馬

炎は呂興を魏の交趾太守に仕立てた。ここに建衡三年(AD. 271)に至るまで、合浦・九真・交趾の諸地域は、次々と太守を代え、益州の士豪を送り込んで交趾制覇を狙う管軍と、これを払拭しようとする呉勢力との角逐の場となった。呉の派遣軍の中には、呉の交州刺史陶璜の下に、虞翻の子の記、薛綜の子の翊が部将として見えるのである。この交趾争奪戦は、呂興らが反乱に当って指向した越南吏民の抵抗運動とは本質的にかかわりのない呉管の争いに喰ひてしまった。領有戦は一端呉の勝利に終わった。功によって交州刺史に起用された陶璜は、平呉(AD. 280)ののちには曾に仕え、そのまま交州刺史として在任した。陶璜の三〇年に及ぶ治政は、「威恩を以て」百姓を和し、その死を聞いて挙州号哭し、慈親を喪うが如くであった、とは晉書(五十一)陶璜伝の記述であるが、これは後漢書賈琮伝の呉管版にすぎない(『注』)。陶璜の交州支配の基本は「唯だ兵のみこれを鎮す」(『本伝』)と切言してはばからない外來官僚の支配であった。このように中国支配そのものの一見士變以前に復したかに見える黄武五年以降の越南社会であるが、在地土着勢力の発展は、その都度中国の鎮圧支配を受け止めながら、徐々に、より著実にすすめられていったも

のと思われる。われわれはそれを、たとえば四世紀以降の交州刺史職の機能と実体を考察することによって窺い知ることができようであろう。(一九七・一・二・一)

(立教大学文学部教員)

#### 注(1)

士燮関係の従来の研究成果については、まず中国宗教史からの考察が挙げられる。中国初期仏教史上高名な『牟子理惑』の著者牟子の研鑽生活の場が士燮政権下の交趾と密接な関係を持つ、という視点で士燮がとりあげられている。諸研究についてはそれを集大成した福井康順『牟子の研究』とくにその第四章漢末三国の交州を参照されたい。(同氏『道教の基礎的研究』所収、東京、九五二)

第二は中国史(漢末三国史)の一環として交州をとらえた諸研究。宮川尚志『三国の分立と交州の地位』(『東洋史研究』七・二・三、一九四二)は、孫呉・劉蜀・司馬懿の交州争奪に関連して士氏政権・交州をとり上げており、これを受けて尾崎康『後漢の交趾刺史について』士燮をめぐる諸勢力(『史学』三三・三・四、一九六二)は、交趾刺史から交州牧への制度的改変を考証し、併せて士燮と中国諸政権との関係交渉を調べている。また宮川氏には別に『漢民族の南進と儒教の南方住民教化』(『岡山史学』四、一九五八)がある。みなそれなりに教示されるところが多いのであるが、このヴェスト

ナム史としての士燮政権の性格なり位置づけなりの点については、配慮の外にある。中国史から士燮をとらえるとき、つまるところは蔣君章「士燮對交州の貢獻」對越南政治文化最有貢獻的漢官(同氏『越南論叢』所収、台北、一九六〇)の、中国人が越南人を開化感化したのだという論理(『優越』『侮蔑意識』)に支えられた一方的な評価に陥る危険性を持つであろう。

ただわが国で牟子研究の先駆的業績をあげた山内晉卿氏に「安南史上の一政權としての士燮」(『史淵』十二、一九三五)があつて、これは諸他の研究にすぐれて士燮政権を取り扱う独自の意図を持つものであり、随処に見える氏の炯眼には啓発されるところが多い。氏はこの中で「その(士燮の)任期の長さ」とも、年輩のたけたことも、教養の深きことも、生粋の地方生抜きであつたことも、土風民俗に通じておつたことも、当時中央から出張する刺史郡守一輩と宛然好対照を為す」と、およそ士燮に関する問題点をすでに鋭く指摘している。本稿はこの先学の指摘を、士燮前後の越南史の考察の中で、私なりに補足説明したものにすぎないものかも知れぬ。

- (2) 『後漢書所見越南三部反乱記事小考(上)』(『新潟大学人文科学研究所』三三、一九六八)、『二世紀の越南』(『史苑』三二・二、一九七二)

(3) 尚書郎のとき「公事によって免官した」その「公事」とは、おそらく桓帝期A.D.160年代の、梁冀実権派對

清流派の政權闘争にからむ諸事件の一つであらうが、どの事件かは指摘しかねる。師事した劉子奇は、この年代に(通鑑では永寿元年(A.D.186)、政府紀彈の上疏をしている。

- (4) 本節の基本史料は、士燮伝のほか、魏志蜀志伝・袁徽伝・蜀志許靖伝・許慈伝、呉志程秉伝・薛綜伝・虞翻伝である。一人物をとり上げて各伝に多岐にわたるから、本文では特別な場合を除き、以上の各伝(袁注も含む)についてはその都度出所を明示していない。

- (5) 明の歐大任の『百越先賢志』卷三劉熙案によれば、彼は「蒼梧・南海を往来し、客授せる生徒は數百人。……建安の末に交州で卒した」という。

- (6) 七郡諸督薛令と袁徽書簡との間にこのような関係があるとするならば、後者は前者が免せられた建安十年後をさほど隔たらず以前に出されたものと思われる。後者又中の「一郡を保有して二十余年」はそこで建武が合う。中平元年(推定太守拜任時、本文page)から建安十年まではかぞえて二十二年になる。

- (7) 「百を以て数えた」中国の人士が、すべて學術研鑽で割り切れるわけではなく、その必要もない。たとえば劉巴(零陵郡雒陽の人)。この人物は赤壁戦のち曹操に仕え、荆州の江南三郡(長沙・零陵・桂陽)招納の職に当つたが、翌年(A.D.209)劉備が三郡を領有すると、「ついに遠く交趾に適き」(劉巴伝)「張巴と交名

して交趾太守士燮と計議せしも合わず、牂牁道より蜀に入った」(同伝裴注所引零陵先賢伝)。劉巴が、曹操・士燮の提携の再確認を議したか、劉蜀・士燮の提携を策したのか、そこはわからないが、呉と交州との接觸は「孫氏に對立する」(同上)彼の採るところではなかつた。計議破れて劉巴は、両許とは別に、一足先きに入蜀し、益州牧劉璋に仕えたのち、劉備の幕下で活躍する。このような策士型中国人士は交趾にいくつも遊留していたと思われる。

- また当時の交趾には中国から「神仙術鍛長生の術を為す人物が多く在在していた」(牟子理惑序伝)。残念ながら彼らの身許と交趾での行状がわかる人物は、神仙家董承(注16)を除いては「これも然然とはしているが」いないので、ここではとりあげない。福井氏論著

- (8) 赤烏八年(A.D.235)、呉の後継者をめぐる権力闘争に破れて顧譚その弟顧承および張休らは交州に徙された。張休は政敵に計られて死を賜い、譚は幽憤自悼二年の揚句交趾で死に、承も同様の末路を辿つた。しかし江南の名族である彼ら(顧氏は呉郡、張氏は彭城)の計は虞氏と同じく、つががなく故郷に帰葬されたであろう。

- (9) 黄龍三年に呉政府で交州刺史呂岱を長沙に転任せしめる議が起つたとき、後任刺史はいかなる人物であるべきか、とのテーマで、薛綜が孫權に提出した上疏文である(呉志薛綜伝に収録)。上疏文中に述べられた具体的事

例を「ことごとく事実と認めてよいから」とは別に検討を要するが、一貫して流れる対越南観には注意すべきものがある。本稿ではその点を取り上げて、行論に必要な部分の引用にとどめた。全文は宮川氏(注1)の第一論文に訳出されている。

(10) 劉熙の「釈名」釈音師第十五には、磬(耳飾り)を「き」のように説明している。「耳を穿ち珠を施すを磬といふ。これも虫夷の所為(風俗)より出づるなり。虫夷の婦女は髻がるしく淫好にして走ら。故にこの眼帯を以て耳に鍾すなり(走れば鳴る、だから淫遊が防止できるということ)」。今の中国人はこれを倣するのみ。この虫夷とは、かならず交趾社会の住民を指すであろう。管見の及ぶところ、彼の南方生活意識の一端を露呈したものは、著作中この一条に尽きる。もって劉熙大師の対越南観を窺い知ることができよう。

(11) 史料はもとより一般庶民の移住は特記してくれない。しかしたとえば、浦部出身の桓碑は初平の大乱事に「地を会稽に避けたが、ついに(これも孫策の会稽領有のことか)海に浮んで交趾に客となった」(後漢書列伝二七)。

(12) 三世紀交州の宗教事情については、福井氏論著(注1)pp.25を参照。また、宮川氏(注1)第二論文は、胡人禁書の行事をば、儒教の論理的治政に依らない一種の呪術的方法による土俗の政治行動であつた

と考へる。一見識ではあるが、私は採らない。儒術と宗教を現実の行政面で区別する基準は無いからである。

(13) 呉は永安七年(254)にふたたび交州を分つて広州を設置した。これは直接的には前年の交趾反乱の対策措置であつたが、そのご交州を言と争いながら越南を戦火にさらし、平呉ののち広交二州の分離行政区劃が定着するようになる。二州分離はこのように黄武五年以降の交州政局にからみつつ定着していくのであるが、一方二世紀以降越南社会の自律的發展が合浦以北を分離する傾向にあり、それがこのような政策を執らしめた底辺にあると思われる。参照 注(2)第三論文の注(32)。

(14) 全書ではこの事件を数年後の、竟・翳が殺され、土国が死に、土威が死んだあとのこととしている。桓治らの行動を土氏権力解体の直後とすると不自然にみえるために、このような処置をしたのであろう。

(15) 「世伝、王既薨之後至晉末、凡百六十余年、林邑人入寇、掘究王塚、見其体面如生、大惧乃復封葬、土人以為神、立廟事之、号土王德。蓋其英氣不朽、所以能神也」(神代卷下)。「全書外紀卷三末尾與土連口」(幽霊集の本文と照対すれば、呉氏のこの文が幽霊集に拠つたものであることがわかる。全書凡例の「國人皆呼王」も「後加王諱」も幽霊集の所伝を踏まえたもので、全書は土王の評価を幽霊集あるいは同類の所伝に依拠していたことがわかる。

(16) 「葛洪神仙伝曰、雙喜病死已三日、仙人董奉以丸藥

与服以水含之、捧其頭搗精之、食頃即開目動手、顔色漸復、半日能起座、四日復能語、遂復常」(呉志上卷伝裴注)。現行の葛洪「神傳伝」には同巧異曲の所伝が記されているが、その「神傳伝」卷六章承伝(漢魏叢書九十六種本による)では、交趾太守士燮は交州刺史杜燮となつてゐる。「士」が「杜」に演変したのは、たぶん、四五世紀の間に交州刺史の重任を果たした交趾の上豪杜氏三代にわたる政権の存在をふまえてのことであろう。しかるに葛洪が広州羅浮山で煉丹・著述に専心して升天したのは西紀三三〇年代で(佐中杜「葛洪の生涯とその風格」(「東方学論集」第三、一九五四)つまり交趾に杜氏出現以前のことである。とすれば現行本の「杜」字は五世紀以降の改筆であり、その間にあってウエトナム側では、「杜氏」は士氏の後裔である(「全書外紀注」という所伝が生まれた。

(17) マスハロ氏は趙光復王位存続の実在性を疑っているが、今は問題にする必要はなからう。cf. H. Maspero: La dynastie des miao-raux 前巻 (541-601), BEFEO XVI-1, 1916.

(18) このように考えられるとすれば、数々の勅封・加封の福神取録集である「男何幽霊集」そのものの性格自体もあらためて検討に値する。幽霊集著録の二十八神の勅封加字については、「抵抗の歴史」で表示してある。なお本稿の幽霊集は写本「男何幽霊集録」(東洋文庫蔵)に拠る。

1 燮(後盛)

つてゐる。

(19) 「黎文休曰、土王能以寛厚、謙虛下士、得人親愛、而致一時之貴盛、又能明義識時、雖才勇不及武帝、而屈節事大、以保全疆土、可謂智矣」(「全書外紀三」)。

「大越史記」は元良問使の五ヶ月前、すなわち紹隆十五年正月に進まれている(「全書外紀五陳聖宗紀」)。そして元良が銅柱の旧界を問うたことは、直接的には大越・古城間の境界に關してであつた。とはいえ元はすでに一五八八年の元良哈台による交趾侵入以來たえず使を送り、ために越南社会は緊張しつづけていた。

また、この黎文休曰くを全書がそのまま取録したのであるとすれば、大越史記は「土王」の名称を知っていた。

(20) 「越史略」という書物が、一五世紀以降中国で保存されていた(中国側の手で改変された可能性を持つ)ということも念頭に置いておく必要がある。

(21) 演歌の土王句はつぎの如し。(柳文堂蔵板「大南国史演歌」維新二年(A.D.1908)刊による)

徧流吏國士王 淵源洙泗瀾塘禮文  
風標室墨守臣 聘輅審牧瓊躡趙陀  
士徽徽符壽茹 捷塘逸好麒麟仇奢  
彌軒ノ倅繫囚 節施吏属衛晏自呢  
兵戈跋閭曉時 賈差陸慨麗台藩臣

これは字喃である。前半を川本邦簡氏の訳文(「マストナ

ムの詩と歴史』東京、一九六七、頁三七)によればつぎのようになる。

儒の流れ南に遷り 儒を伝う土王のありて そのか  
みに聖が洙泗に おこしたる礼文を説きぬ。  
高潔を民は讃えて この地の太守と仰ぎ いにし  
えの武王趙佗や 炎漢の褒牧につぐ。

(22) 陶璜と越南との関係はあとで触れる。杜氏は陶氏とも  
士氏ともちがって、交趾土著の東晉末期に活躍した上豪  
で、交州刺史を三代にわたり兼任した。杜氏がヴェトナム  
史に果たした役割りについては、『抵抗の歴史』の中で  
触れてある。

本稿の大越史記・越史略・大越史記全書の関係につい  
ては、その書誌学上の考察を、山本達郎『越史略と大越  
史記』(『東洋学報』三二四、一九五〇)および同先  
生の東京大学文学部における一九四八年度講義『印度支  
那史』の受講ノートに負うている。このノートに土壁は  
一度も顔を出していないけれども、爾来二〇年間、越南  
史の学習を指向せしめ、史学研究の場を与え続けて下さ  
った恩師に、それにもかかわらず今なお不肖の学生の私  
であるが、この拙い論考を献げたいと思う。

(一九七二・四・一)

#### 駒井先生の急逝を悼む

昭和四十六年十一月二十二日、東京大学名誉教授・元本学非  
常勤講師、文学博士駒井和愛先生急逝さる。

駒井先生は明治三十八年東京に生れ、昭和二年早稲田大学文  
学部を卒業、同年東京帝国大学文学部副手となり、十三年同学  
部講師、二十年助教授、二十六年教授に昇任せられ、幾多の俊  
秀を育成されるとともに、貴重な研究を発表せられわが国考  
古学の発展に貢献せられたが、昭和四十年定年申合せにより東  
京大学を退官せられた。

この間、先生には昭和五年九月から、大戦中の本学文学部閉  
鎖の時期をのぞいて、四十五年三月退職せられるまで、本学文

学部非常勤講師として史学科の考古学、東洋史特講、あるいは  
大学院史学専攻課程の東洋史特研の講義を担当せられるととも  
に、発掘調査の指導にあたられたが、本学の考古学資料皆無に  
ひとしい状態を見られた先生は、華北・満洲・蒙古・朝鮮など  
の発掘調査に参加の都度収集資料の一部を寄贈された。しかも  
その整理に当って先生は、私費を以って「立教大学史学研究  
室」の名入りのカードを作成され、資料の解説を行なわれるほ  
どの熱意を注がれた。まことに本学考古学資料室の開設と整備  
はひとえに先生の厚意によるものであったといえよう。

ここに先生の生前をしのび、謹んで哀悼の意を表する。

(宮本 肇太郎)